

【六月の言葉（平成三十年）】

悩みや苦しみを抱えながら

それに押しつぶされることなく 生きていく

比較的若いご夫婦で、よくお寺にお参りされ、ずっと浄土真宗の教えを聞いてこられた方がおられます。ある時、お子さんが交通事故に遇って亡くなってしまわれました。その時お母さんがおっしゃったのが「厳しいお諭しでした」という言葉だったそうです。どういう意味かと言うと、今までのちはいつ終わるかわからないということはずっと聞いてきたけれども、実際に自分の子が亡くなる場に遭遇して、聞いてきたことがあくまで聞いてただけで、自分自身の問題にはなっていないかったと気づかされた、というのです。そうは言っても、ずっと教えを聞いてこられたからこそそれがわかるのであって、やはり聞いていなければ気づけないと思うのです。では、聞いているから自分の子の死をそのまま受け容れられるかと言うと、やはりそうではない。そうした、どんなに素晴らしいお話を聞いていても、わが子の死を受け入れられない私が、その一方で、私を超えた大きなはたらきによってそのまま肯定されていく世界があるのです。

何ごとも思い通りにしたいという自己中心的な姿は否定されるべきものです。が、同時にその自己中心的なあり方から離れられない自分が肯定されていく。そこには矛盾があります。しかし、その矛盾している状態がそのまま認められるのが本来の姿だと思うのです。うれしいこと、悲しいこと、すべてをひとまとめにして生きていること、生かされていることは素晴らしいと受け止められるようになりたいたいものです。